

今日は、私が鹿児島復活教会の管理牧師になって最初の礼拝説教ということになりました。大齋節第5主日の説教は、もう3週間くらい前にホームページに公開しています。それをそのまま説教することも考えましたが、このところ、私は「み言葉の礼拝」について、大変興味を持つようになったので、そのことをお話ししたいと思います。

この4月から人事異動のため、私が鹿児島に来て、また中島司祭は大口に行くことがなくなったため、鹿児島では毎週の日曜日、毎週聖餐式が行われる、ということになるのでしょうか。そうすると皆さんは今後しばらく、み言葉の礼拝をする機会がなくなるだろうと思います。

日本聖公会にこの「み言葉の礼拝」という奇妙な礼拝式文が入って来たのはどうしてだと皆さんは受け止めておられますか。

私自身はみ言葉の礼拝をすることがありませんので、式文の最後にある『「み言葉の礼拝」について－使用上の一般指針－』というのを久しぶりに読んでみました。ハッキリ言って、これは日本聖公会に司祭の数が少なくなったので、その対策に作ったような印象です。使用上の一般指針の最初には、『主日、あるいは祝日に司祭が不在であっても、会衆が聖書のみ言葉を中心に共に祈り、感謝と賛美の豊かな礼拝を献げることができることを意図して、この式文は作成されました。』と書かれていました。

また、その次の項目を読んでいくと、『主日に他教会と共に、その日の福音書を、旧約聖書朗読、使徒書朗読と合わせて味わい黙想できるように、また代祷が重視される』などのことが書かれていました。そして、式文の内容を見て行くと、パンとぶどう酒はいただけないが、あとはほとんど聖餐式文と変わりません。

結局、牧師が司式する聖餐式に慣れている信徒の人々が、急に昔から司祭が居ない時に行っていた「朝の礼拝」などをすると、礼拝の形式が全く違いますので、あまり戸惑わないように配慮して行っているのが、日本聖公会各地で行われている「み言葉の礼拝」である、ということのように私には受け取れたのです。そしてそこには、聖餐式よりも格下の礼拝としての「み言葉の礼拝」という位置づけを私は感じ取って、み言葉の礼拝を行なう、積極的な魅力を感じませんでした。

私は1年前までは、宗像の教会に住んで、同時に八幡の教会の牧師をしていたのですが、この二つの教会は、私がそこに赴任する前から、「み言葉の礼拝」を行うことを拒否して、今でも朝の礼拝を行なっているのです。私は宗像や八幡の信徒の人々の気持ちを聞き、礼拝学の本を読み直しました。そして、朝夕の礼拝が、聖餐式とは違って、信徒によって自然発生的に行われてきた伝統の上にある大切な礼拝である、と認識いたしました。そこで、宮崎では、今月から私が鹿児島と延岡に出かけるので、2回の日曜日を留守します。それで、従来のみ言葉の礼拝を月1回。そしてもう1回は、朝の礼拝をすることにしました。今日は宮崎では久しぶりに朝の礼拝を行なっているでしょう。しかし、私が今日お話ししたいのは、朝の礼拝のすばらしさではなく、どうしてみ言葉の礼拝が生まれたのかという話です。

今まで祈祷書になかった「み言葉の礼拝」というのが、どこから入って来たのか、数年前にイギリスみやげにもらった祈祷書。今から17年前ですが、西暦2000年にできた、英国聖公会の祈祷書「コモンワーシップ (Common Worship)」を見ると、この祈祷書は、私たちの持っている祈祷書と同じように、最初には教会暦、降臨節から、一年の終わりの王なるキリストの主日まで書かれているのですが、その次には、私たちの祈祷書では、朝夕の礼拝式文が載せられている所に、英国の新しい祈祷書では、こんな見出しが出てきていました。「み言葉の礼拝、朝夕の礼拝、就寝前の祈り」。ナント、朝夕の礼拝より先に、「み言葉の礼拝」というのがあるんですね。英語のタイトルは、「A Service of the Word」まさにみ言葉の礼拝ということになります。

ところが、その「み言葉の礼拝」の内容を見たら、またビックリ。ナントこの礼拝について、本文の前の解説は3ページ、本文の後の、この礼拝についての注意書きは2ページあるのに、その間に挟まったみ言葉の礼拝本文はたった1ページなんです。こんなもので礼拝できるのか？と思って読んでみると、礼拝の骨組みが書かれているだけで、あとは自分で工夫して自由にやりなさい、ということらしいのです。

礼拝は4つの部分によって成り立ち、①「準備。」ここで司式者が最初の聖歌とか聖句に続いて挨拶をして、決められた懺悔の祈りなどを用いてもいい。そして詩編95編とかキリエ、大栄光の歌、などの後特禱を唱えるが、それは3番目の祈りの時でもいい。②「み言葉の礼拝式」ここで、聖書の朗読を複数か場合によっては一つ読む。そして詩編か聖書的な聖歌を歌う。そして説教。定められた信経か定められた信仰の宣言を唱える。ところが、この説教と信経や信仰の宣言は、日曜日や特別な祝日以外は省略してもいい、と後ろの注意書きには書かれていました。

あれれ、イギリスのみ言葉の礼拝というのは、日曜日だけでなく、普通の日にもやっていいのか、とその辺りから気づかされたのです。

③「祈り。」これには代禱や感謝が含まれる。そして主の祈りをする。④「締めくくり。」祝禱、ハレルヤ主とともに行きましょう、などの締めくくりの言葉による礼拝の終了。

このみ言葉の礼拝については、解説書を見てみると、どうしてこれが祈祷書に取り入れられることになったのか、詳しくすぎるくらいの解説が、2世紀頃から宗教改革、18世紀、19世紀、20世紀の聖書を読む礼拝の形式の変遷を語っていました。そして、「家族の祈り」という、朝夕の礼拝よりも短いものが普及するようになった、という背景の説明もありました。そして、今回の「み言葉の礼拝」というのは、イギリスの中でも、聖公会が国教であるイングランドだけでなく、同じブリテン島の北部スコットランドや隣のアイルランド島の北部のアイルランドの聖公会でも、似たような形式の「み言葉の礼拝」を取り入れているようです。

しかし、これらのイギリスの教会のみ言葉の礼拝は、「日曜日に司祭が居ないと困るから」などという理由では全くありません。司祭が居ようと居まいと、今までの聖餐式や朝の礼拝では、現場の状況に対応できない、という事情のために、簡素なみ言葉の礼拝を提案しているようです。

私が見つけた、一番わかりやすい説明をしている、アイルランド聖公会の説明文を引用してみます。

『教会の中には、従来の決められた朝の礼拝とか夕の礼拝、あるいは聖餐式では、特定の会衆の必要を満たすことができない場合がある、ということが広く認められています。「家族の礼拝」とか「すべての世代のための礼拝」、またキリスト教にあまり関わりがない友人を招く人々の、「伝道的な礼拝」など様々な形式ばらない礼拝のかたちの実験がこれまでであったからです。このみ言葉の礼拝の基本的な構造は、そのようなすべての礼拝のことを念頭に置いているのです。』

私は、イギリスの教会が、現在の信徒や、その人たちが新しい人々を教会に招こうとしている姿勢に対応し、それに協力するために、形式ばらない、今までの礼拝とは違う、独特のいろいろに応用できるみ言葉の礼拝を作ってきたことに驚きました。そして、そのような視点から、礼拝を見直していることに励まされたような気持ちになりました。

このような姿勢は、礼拝だけではなく、私たちの教会や教区の働きにも影響のあるもののように感じています。

宮崎の教会は、今年の1月、総会を前にして、女性の会である「マナの会」を解散しました。比較的年齢の高い人たちで構成されているマナの会で、一番の高齢者が病気で入院。その次の高齢の人は、娘さんの家に引き取られて千葉県へ引っ越し。一方、50歳台や40歳台の女性はマナの会へ入らない、という現象が起こって、毎月第4日曜日には、わずかな人数でマナの会を維持する意味があるのだろうか。本来、日本聖公会の婦人会は伝道のために、その援助を目的として発足したのに、その女性の会の維持のためだけに時間を費やすのはおかしいのではないか、ということになりました。そして、1月の第5日曜日の信徒総会で、マナの会が解散になったことを報告し、2月からは第4日曜日には、午後「教会の宣教を考える会」を発足することになったのです。

その結果、女性の会には入っていなかった女性たちや男性も加わって、教会に町の人々を招くためにはどうしたらいいか、いろいろアイデアを出し合いました。先週の日曜日にも2回目の「教会の宣教を考える会」を開きました。そして、「教会に来てもらえるように、手渡しするパンフレットを考えよう」とか「礼拝体験をしてもらうためのプログラム」「プロジェクターを使った礼拝の聖歌や詩編、説教の掲示」など、いろいろと意見が出ています。

教会を取り巻く環境が変わった時、教会もそれに応じて、工夫をすることが大事なのではないかと思えます。パウロは自分が宣教のために何でもすることを手紙に書いていました。

コリントの信徒への手紙一の9章22～23節です。

『弱い人に対しては、弱い人のようになりました。弱い人を得るためです。すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです。福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです。』

教会のあり方について、もっと工夫して歩む者でありたいと思います。